

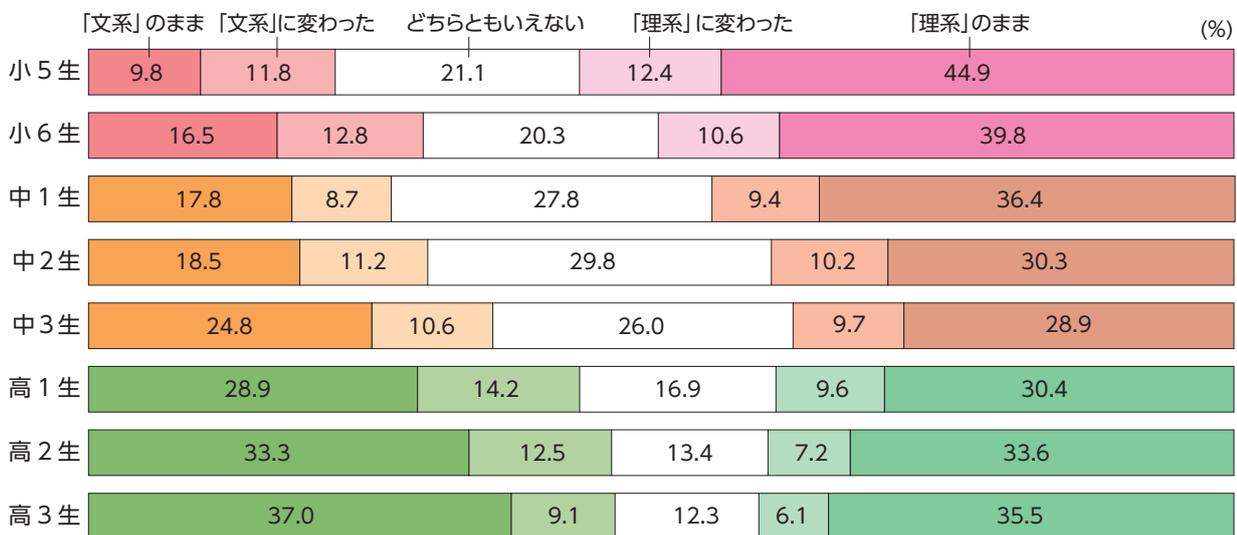
文系・理系の自己認識が「文系」に変わった子ども、「理系」に変わった子どもが、どの学年でもそれぞれ1割前後いる

文系・理系の自己認識の変化をみると、「文系」のままの子どもは、小5生(9.8%)から高3生(37.0%)まで徐々に増加するのに対して、「理系」のままの子どもは、小5生(44.9%)が高く、中3生(28.9%)まで減少し、高3生で35.5%となる。また、「文系」に変わった子ども、「理系」に変わった子どもが、どの学年でもそれぞれ1割前後いるほか、中学生では「どちらともいえない」の比率も高く、文系・理系に迷っている様子がうかがえる。これらの自己認識には性差が大きい。

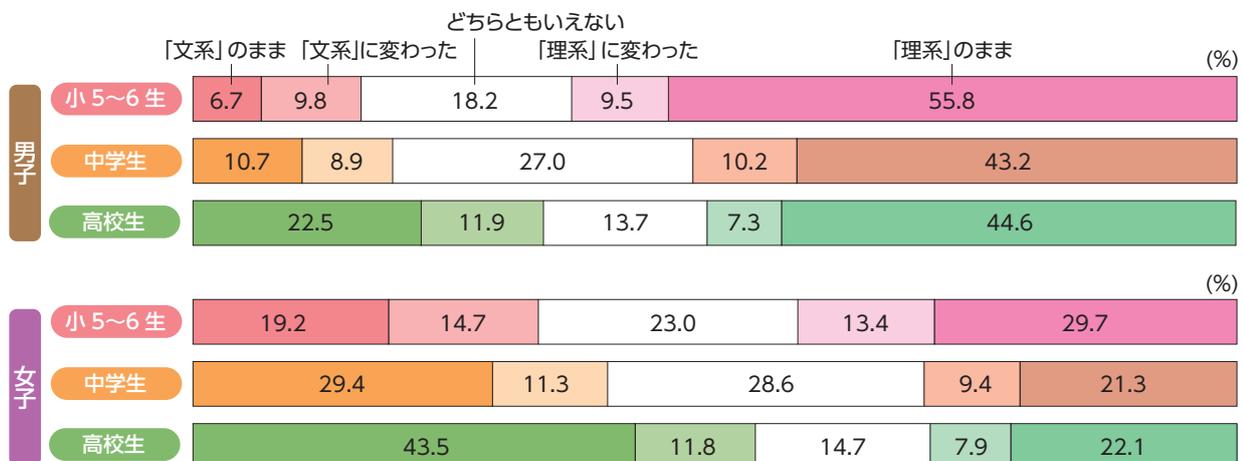


あなたは自分のことを「文系」だと思いませんか、それとも「理系」だと思いませんか。

子ども 2015-2016 図3-1-1 文系か理系かの自己認識の変化(学年別)



子ども 2015-2016 図3-1-2 文系か理系かの自己認識の変化(学校段階別・性別)



注1 「文系」のままは、2015年、2016年とも「はっきり文系」「どちらかといえば文系」と回答した人。「文系」に変わったは、2015年は「はっきり理系」「どちらかといえば理系」「どちらともいえない」と回答し、2016年は「はっきり文系」「どちらかといえば文系」と回答した人。「理系」のまま「理系」に変わったも同様。「どちらともいえない」は、2015年、2016年とも「どちらともいえない」と回答した人、および、2016年に「どちらともいえない」に変わった人。「よくわからない」、無回答・不明は除いて算出している(図3-1-1、図3-1-2)。

注2 2016年の学年(図3-1-1、図3-1-2)。

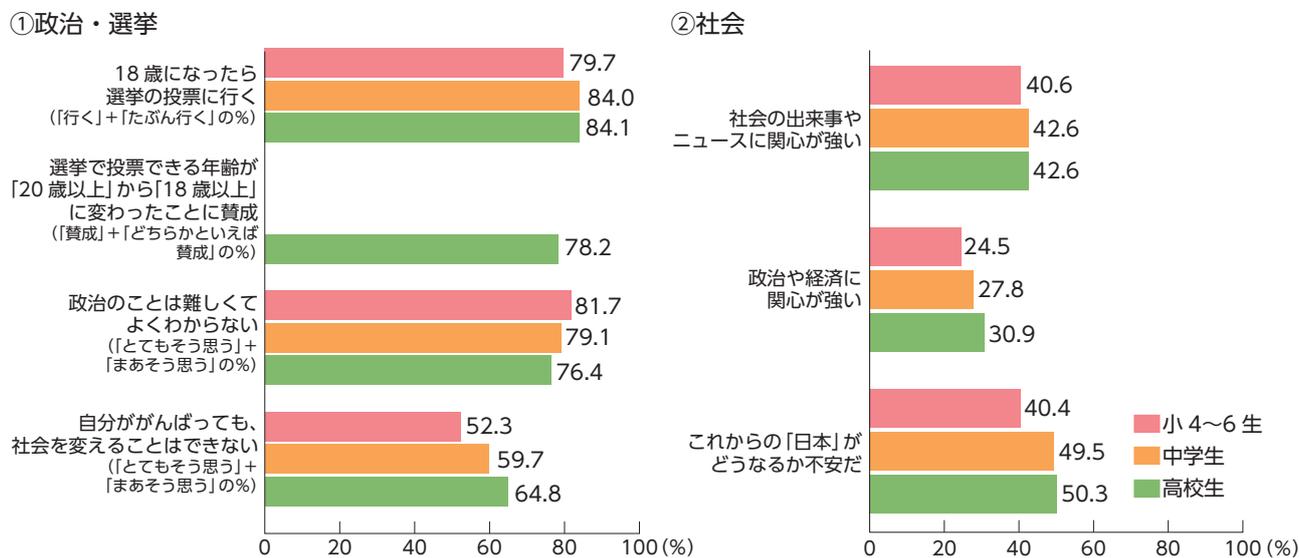
保護者の投票意欲が高いほど、子どもも18歳になったら選挙に「行く」と回答

どの学年でも、8割前後の子どもが18歳になったら選挙の投票に「行く」(「行く」+「たぶん行く」、以下同様)と回答しており、投票に積極的な子どもの様子がわかる。一方、「政治や経済に関心が強い」(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)という子どもはどの学校段階でも2~3割である。子どもと保護者の意識の関連をみると、どの学校段階でも、保護者が選挙に「行く」と回答しているほど子どもも選挙に「行く」と回答している。

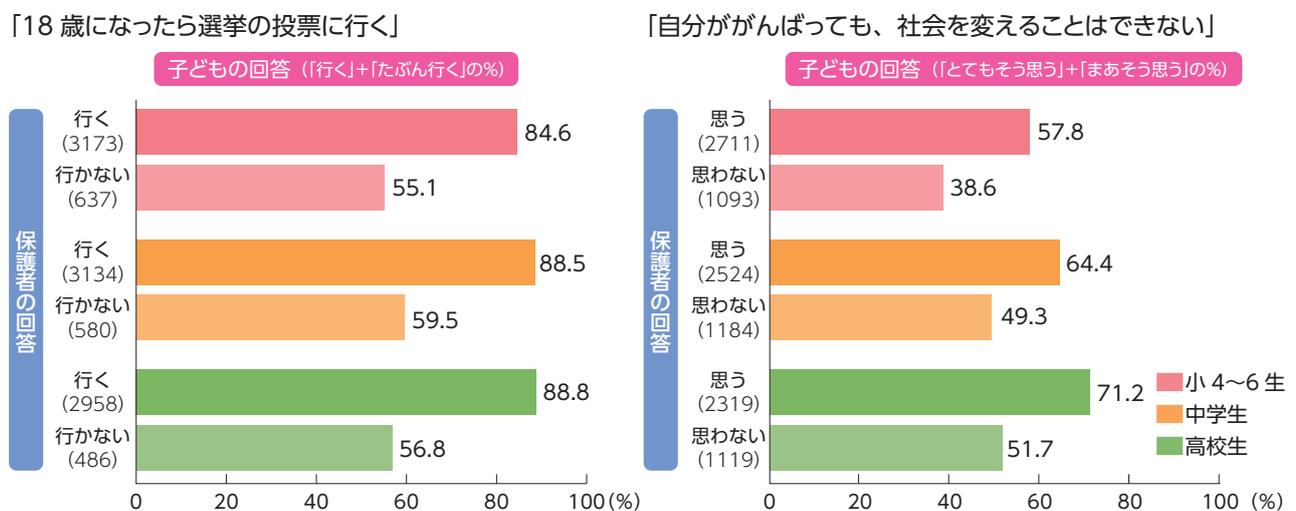
Q 選挙や政治についてお聞きします。

Q あなた自身のことについて、次のようなことはどれくらいあてはまりますか。

子ども 2016 図3-2-1 政治・選挙や社会に対する意識(学校段階別)



子ども 2016 図3-2-2 子どもの政治・選挙や社会に対する意識と保護者の意識との関連 (学校段階別・保護者の回答別)



注1 「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の% (図3-2-1②)。
 注2 保護者には「あなたは、次の選挙の投票に行くと思いますか」と尋ねた設問で、「行く」「たぶん行く」を「行く」、「行かない」「たぶん行かない」を「行かない」としている(図3-2-2左)。
 注3 保護者にも子どもと同様に尋ねた設問で、「とてもそう思う」「まあそう思う」を「思う」、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」を「思わない」としている。()内は人数(図3-2-2右)。